

令和5年度 第1回京丹後市の新たな教育・人材育成の在り方に関する検討会会議録

1 開催日時：令和5年4月25日（火）午前9時30分～11時40分

2 開催場所：京丹後市役所大宮庁舎 第2・3会議室

3 出席者：

浅井 智美 委員

井上 知英 委員

今度 義則 委員

岡田 泰行 委員

荻 弦太 委員

古賀 稔邦 委員

高橋 一也 委員

笠沙 知章 委員

長井 悠 委員

中川 哲 委員

牧野 光朗 委員

ヤング 吉原 麻里子 委員

塩川 達大 オブザーバー

田中 努 オブザーバー

(欠席者)

岩本 悠 委員

田茂井 勇人 委員

事務局：

京丹後市副市長

濱 健志朗

京丹後市教育委員会 教育長

松本 明彦

京丹後市 市長公室長

川口 誠彦

京丹後市教育委員会事務局 教育次長 引野 雅文

京丹後市市長公室 政策企画課 課長 松本 晃治

京丹後市教育委員会事務局 学校教育課課長 川村 義輝

4 議 事

(1) 準備会の議論等を踏まえた論点整理

(2) 子どもたちからの意見聴取の在り方

5 公開又は非公開の別 公開

6 傍聴人 なし

松本教育長：皆様、おはようございます。第1回「京丹後市の新たな教育・人材育成の在り方に関する検討会」の開会にあたり、一言ご挨拶を申し上げます。

さて、この検討会の実施にあたりましては、論点が明確でしっかりとした内容のある検討会を行っていくため、昨年度末には、大変ご無理なスケジュール調整をお世話になり、多くの委員の皆さんにオンライン、または直接京丹後にお越しいただき、2回の準備会を実施することができました。

いよいよ、こうした準備会での事前協議を踏まえまして、本市におけるこれまでの様々な取組を基礎としつつ、Society5.0に対応した新たな教育・人材育成の在り方の検討を進めるため、本日その第1回目検討会を実施する運びとなりました。改めまして、委員の皆様のご協力やご尽力に心よりお礼申し上げます。また新たに委員になられました皆様、途中での参加は難しい面もあろうかと思いますが、忌憚のないご意見をいただければありがたいです。どうぞよろしく申し上げます。

さらに、牧野委員、笹沙委員におかれましては、遠路京丹後にお越しいただいての参加、本当にありがとうございます。

さて、この検討会設置要綱にも示しておりますように、この会議の主な検討事項としましては、地域資源を織り込んだ Society5.0 に対応する教育内容、また教育効果と地域の付加価値を最大化するシームレスな制度の在り方、さ

らには地域・産業界と連携した教育・人材育成の在り方等を挙げておりますが、本日は、「京丹後らしさ」「京丹後でしかできないこと」というキーワードを準備会でも多くの委員の皆様からご指摘いただきましたので、地域資源を織り込んだ Society5.0 に対応する教育内容について、じっくりとご協議いただければありがたく存じます。

結びにあたりまして、この検討会でのまとめが、京丹後市の子どもたちに育みたい資質・能力とその育成のための方策を明確にし、それが教職員の理解を得て、学校での教育課程内外に組み込まれることを祈念しまして、開会のご挨拶とさせていただきます。

本日はどうぞよろしく願いいたします。

事務局：ありがとうございました。冒頭から少し音声が乱れまして申し訳ございませんでした。それでは議事に入らせていただく前に今回から新たに委員になられた方もいらっしゃいますので、本日ご出席をいただいております委員オブザーバーの皆様について、私の方から名簿順でご紹介をさせていただきたいと思えます。資料2の構成員名簿をご覧くださいというふうに思えます。まず、京丹後市商工会青年部研修委員長、Mallows 代表の浅井智美様でございます。よろしく願いいたします。

続きまして前京丹後市 PTA 家庭教育副委員長の井上知英様でございます。

続きまして京丹後市中学校校長会会長、網野中学校長の今度義則様でございます。

続きまして京都府立峰山高等学校長の岡田泰行様でございます。

続きまして丹後機械工業協同組合青年部副部長、有限会社丹後プラスチック専務取締役の荻弦太様でございます。

続きましてオンラインでご出席いただいております、情報経営イノベーション専門職大学副学長の古賀稔邦様でございます。

続きまして会場の方に戻りまして、京都教育大学副学長の笠沙知章様でございます。

名簿前後しまして申し訳ございません、オンラインでご出席いただいております、神田外語大学客員講師の高橋一也様でございます。

続きましてタクトピア株式会社代表取締役社長の長井悠様でございます。

続きまして株式会社 EdLog 代表取締役社長、文部科学省初等中等教育局視学委員の中川哲様でございます。

続きまして会場の方に戻りまして、前長野県飯田市長の牧野光朗様でございます。

続きまして再びオンラインの方でご参加いただいております、一般社団法人スカイラボ共同代表、スタンフォード大学国際文化教育プログラム講師のヤング吉原麻里子様でございます。

また、オブザーバーとして京都府丹後教育局学校教育担当指導主事の田中努様でございます。

同じくオブザーバーの金沢大学理事、副学長、事務局長の塩川達大様におかれましては、本日 10 時 30 分頃からご出席の予定となっております。

なお、本日は岩本委員、田茂井委員はご欠席とお伺いしております。また、高橋委員におかれましては 10 時 45 分頃ご退席をされるというふうにお伺いしております。

委員の皆様、お世話になりますがどうぞよろしく願いいたします。

なお、事務局の紹介につきましては、座席表の方をもって代えさせていただきますので、ご確認のほどお願いいたします。

(資料の確認)

本日の会議につきましては、設置要綱の規定によりまして公開としておりますので、ご承知おきいただきたいというふうに思います。

それでは次第に戻りまして、議題に入る前に、まず座長の選任を行いたいと思います。本検討会の座長につきましては、検討会の設置要項資料 1 に、委員の互選によって定めるというふうにされております。座長の選出につきまして、どのようにさせていただいたらよろしいでしょうか、ご意見がありましたらお願いいたします。

特にないようでしたら、事務局の方から提案させていただいてもよろしいでしょうか。ありがとうございます。皆様が領いていただきましたので、それでは事務局の方から提案をさせていただきたいと思います。座長につきましては京都教育大学副学長でございます笹沙委員にお願いしたいというふうに思います。皆様いかがでしょうか。

ありがとうございます。異議なしというお声もいただきましたので、竺沙先生よろしいでしょうか。はい。よろしく願いいたします。

それでは、検討会の座長につきましては、竺沙委員にお願いしたいというふうに思います。

竺沙座長よりご挨拶をいただき、その後の議事進行についてお願いしたいと思います。よろしく願いいたします。

座長：失礼いたします。座長を拝命いたしました、京都教育大学の竺沙でございます。どうぞよろしく願いいたします。京丹後市が、本当に意欲的にこれからのこと見据えて、新しい教育とか人材育成を考えようというのは、非常に私も賛同しておりますので、皆さん方のご意見をいただきながら、これまでと違う新しい発想でいろんなことを議論できる、そんな場になればいいなと思いますのでどうぞよろしく願いいたします。

事務局：竺沙座長ありがとうございました。それでは引き続き、議事の進行につきまして竺沙座長にお世話になりたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

座長：それでは、これより先、私のほうで議事を進めさせていただきたいと思います。次第に従い進めさせていただきます。

次第3、議事に移ります。議事(1)「準備会の議論等を踏まえた論点整理」について、事務局から説明をお願いします。

(1) 準備会の議論等を踏まえた論点整理

事務局：(事務局説明)

座長：ありがとうございました。内容的にも豊富で量的にも多いですので、少し丁寧に皆さん方にご検討いただきたいと思います。まずはご意見をいただく前にご質問をいただければと思います。特に、言葉の問題であったり、内容的にもう少し説明をしてほしいというところがございましたら、かなり飛ばして簡単に説明されたところもあったと思いますので、もう少し詳しく説明が聞きたいということがございましたら、是非ご質問いただきたいと思います。いかがでしょうか。

委員：今年からこちらに参加させていただいており、今までの経緯が分からないので、この Society、読み方すらちょっと怪しいんですけど、これはどういった

内容なのか教えていただけたらありがたいです。

座長：基本的に Society1.0 から 5.0 まで、これは人類の歴史を表しています。特に人類の経済活動というものが大きく転換する時期がいくつかあって、今後を見通した時に Society5.0 の時代が来るだろうというふうなことで捉えているもので、ICT を使ったような新しい未来社会というものがこれから来るだろうということで Society5.0 ということが一つのモデルという形で捉えられています。

現在は Society4.0 で情報化革命が起こった時代。産業革命がたぶん 3.0 だったと思うんですけど、そんな形で人類の歴史を見た時の今の時点っていうものを表して、さらに将来を見据えた時に新しい 5.0 が来るだろうと、そういう様々な技術革新が起こって、AI とかも含めて今までできなかったようなバーチャル空間も含めて新しい社会のあり様というのが見えてくるので、その中で人の幸せのためにはどういう社会があったらいいだろうかっていうこともこれから考えていくということになってくるとは思いますけども、そこで生き抜く力を子どもたちがを見つけることは必要だろうというふうなことで、Society5.0 ということ見据えた人材育成というふうなことを今考えましょうということになっているかと思います。国全体としてもそういう方向で議論されていて、GIGA スクールなんかもそういうことを想定して構想されて今実現しているというようなことかなと思っております。

京丹後市の事務局としてどう受け止められているかというのも、ご説明いただいてもいいかと思うんですけど、いかがでしょう。

松本教育長：今座長が言っていたように、狩猟社会の 1.0 から農耕社会の 2.0 になって、情報化社会が 4.0 で、5.0 はいわゆる超スマート社会と言われる GIGA スクール等の構想によって、そういう社会がやってくるというようなところで言うておりますので、その情報化のその先という新しい社会の在り方というのが 5.0 というふうに、座長の言われるとおり京丹後市も捉えております。

座長：今のようなご質問をどんどんしていただいた方がいいと思いますので、是非お願いいたします。

委員：私も初めて聞く内容で、例えばアントレプレナーシップ教育とか STEAM 教育とていう言葉は初めて聞くんですけど、これは現在京丹後市で取り組まれて

いる内容なのか、それともこれから取り組もうとしている内容なのか、単語の内容も分からないんですけど、簡単に説明していただければありがたいです。

座長：アントレプレナーシップ教育は、起業家を育成するっていう教育になりますけども、京丹後市でも部分的にやっておられるんでしょうかね。お願いいたします。

事務局：総括をしております久保と申します。アントレプレナーについては起業というあたり、STEAM と言えば Science (科学)、Technology (技術)、Engineering (工学・ものづくり)、Art (芸術・リベラルアーツ)、Mathematics、この5つの頭文字を取って STEAM っていうあたりの教育を今後進めていくことが大事だと言われていました。

本市においては、何もしていないわけではないんですけど、やはりこれからの分野かなというふうに思っているところですので、先ほどの船の絵のところに、その中の教育でこういう力をつけていきたいなというふうに今すごく力を入れていきたい教育の分野であるというふうに捉えていただけたらと思います。

委員：ありがとうございました。

座長：他、いかがでしょうか。

委員：先ほどの Society5.0 に関わってですけども、現状京丹後市の方でそれを意識している具体的な事例というようなことを紹介いただけますでしょうか。

事務局：Society5.0 の世界にどう対応していくかっていうあたりにおいては、どこか一つの教育でこういうものをつけていくというよりは、先ほどの船のイメージであった社会を生き抜く力をつけていくということが本市としてはとても大事なことであるというふうに考えております。その社会を生き抜く力の下に、6つほど資質能力的な部分を書いていたと思うんですけども、そのあたりをつけていくために、今丹後学という地域教材を使った学習を充実させていたりだとか、一つ一つの教科の学習の中でも友だち同士がつながり合うようなそういう学習形態を取ったりだとか、また1人1台タブレットの方も配備されておりますのでそのタブレットを有効に活用した授業をどうつくっていくのかというあたりを進めておりますし、MESH という IoT を使ったプロ

グラミング教育というものについては昨年で初めて中学校3年生の技術分野の教材として入れましたので、少しずつそれに対応する資質能力をつけるために今教育を変えたいなと思っているところであるということが答えになるかなと思っております。以上です。

座長：ありがとうございます。他、いかがでしょうか。

委員：今久保総括から学校教育の場でどのような取組がなされているのかという話をいただいたと思うんですけども、京丹後市教育委員会では松本教育長のビジョンのもとに、普段学校教育の中では学べないようなアプローチで子どもたちの学びを活性化しようということで、昨年度から Kyotango Sea Labo という、実験的なプログラムが行われております。そちらについても後ほど機会あります時にもう少し詳しくご説明できればと思いますが、学校教育の中、そして学校教育の外で京丹後市では最先端で取り組まれているというふうに私は理解しております。

座長：どうもありがとうございました。オンラインでご参加の委員の皆さんも是非声を出していただければと思いますので、よろしく願いいたします。
他、いかがでしょうか。

委員：中学校のプログラミング IoT の実践をご紹介いただいているんですけども、もし小学校でもお取組のところがあれば教えていただけませんか。

事務局：中川先生ありがとうございます。小学校については本当にまだまだこれからでして、一人一台タブレットがある中で、Scratch とかそういうサイトを使っでのプログラミングはできておりますが、中学校のように、自分たちが組み立てたものが実際目の前で動いたりだとか、反応したりだとか、声が出たりだとか、そういうプログラミングというあたりにはまだ全然達していない状況です。これからの分野になっています。

委員：ありがとうございます。ちなみに文部科学省の仕事で調べたデータで、今おっしゃった Scratch というのは、実は GIGA スクールが導入されてから日本ではユーザー数が3倍に増えてるんですね。なので、京丹後でまだまだ取組がこれからということであれば、ちょっと私も尽力させていただいて、小学校でのプログラミング教育というのを進めていこうかなというふうに思っています。すみません。質問のコーナーでしたが意見もさせていただきました。

委員：丹後学の話をもう少し詳しく教えていただければと思うんですが、取組例という話を聞きしました。モデルカリキュラムについても1枚にまとめていただいております。その結果として、どんな成果が出ているかというあたりをもう少し詳しく教えていただければと思います。

事務局：前回の資料の中にも、丹後学の状況というあたりを入れさせていただいておりました。現在、先ほども申しましたが小学校の3年生以上で、この総合的な学習の時間の中で地域に関する学習、各校が地域の人、環境、文化、産業などの具体的なテーマを設定し、また探究的な取組を進めているところです。これを学んだ子どもたちが現在大学生にもなり、大学の講座の中で、小中学校で学んだその丹後学を語る生徒も出てきてくれているということが大変うれしいことだなというふうに考えております。

より今後は丹後のことを、地域への愛着と誇りという部分が持てるような、そんな学習にしていきたいなというところと、さらに Society5.0 で目指す環境という部分については、この総合的な学習の時間のここを使いながら高めていきたいなというふうに思っているところです。成果として答えになっているでしょうか。

委員：(2) で詳しく説明していただけるのならそれでもいいんですけど、例えば、この丹後学の学習を通じてより京丹後市のことが好きになった生徒が増えているとか、あるいは将来住みたいと思う生徒が増えているとか、そういう具体的な数字がもしあればという、そういう意味合いなんです。

事務局：市長公室の方が、毎年高校生と中学3年生の方を取っていただいているアンケートも、今日資料として出させてもらっているのではないかなと思います。参考資料2の方をご覧ください。その中の中学校3年生につきましても、あなたは京丹後市が好きですかというあたりの回答については、ほぼ9割が京丹後を好きというふうに回答してくれているというような結果も得られていますし、ただ、好きなんだけれども、社会人になってから京丹後に住みたいですかという問いについては住みたいが51パーセントで住みたくないが49と半々になっているのが現状です。

また、高校生に対するアンケート調査も取っておりまして、その資料の中にありますとおり、丹後地域への好感度は高く、好きの系統の回答が9割を超

えているというところがあります。居留意欲については6割近くが住みたい系統の回答をしています。住みたいが増えてきているということが年々上がってきていますので、高校生の中に居留意欲が増したっていうあたりがここ数年のアンケートの結果では見られているというところがあります。

座長：丹後学の成果は、高校側で何か感じられるところはありませんか。岡田委員いかがでしょう。

委員：学校の方も点々としておりまして定点的なものではないんですけども、ただ、間違いなく10年ほど前の高校生と比較をして、丹後に対する愛着であったりとか、丹後に帰ってこようというような意欲を持った生徒が、確実に増えてきたんじゃないかなっていう肌感覚は持っています。小中学校の方で丹後学をしっかりと取り組んでいただいているその流れで、高等学校もようやく探究的な学習というのも本格化してまいりまして、そういう意味では非常に丹後について学べる環境が整ってきたかなっていうふうに感じています。

委員：先ほどのご質問のご回答の中で、京丹後に帰ってきたっていうお子さんが増えているというお話がありましたが、市の方の補助で、移住者なんかの手当て等は手厚いのに、帰ってくる子どもたちに対してはあまりそういう恩恵が受けられないっていう声を聞いたことがあります。実家がこっちにあるんだから家の補助とかが出ないとか、そういうことを聞くんですけども、教育委員会でやられていることを市が引き継いで、戻ってくるのを後押しするような政策とかはないのですか。

事務局：市長公室の川口と申します。移住定住施策ということで私の方から答えさせていただきたいと思います。平成27年度から本格的に施策を市長部局の方でやっております、今の補助金の関係ですけれども、空き家改修事業の補助金の制度のことを言われているのかなと思うんですが、Iターン者も対象になりますし、Uターン者も対象になるということなんです。ただ、今言われたようにIターン者に対しては厚くて、Uターン者に対しては薄いのではないのかという声もお聞きする中で、昨年度から、その地域に住む、実家にこう住む、改修をするというようなことに対しては、新たな制度を設けています。地域に帰って親と一緒に住むようなところで改修をしていくような、そういったようなところについても支援をするような制度も設けたところでございま

して、Uターン者もどんどん帰ってきていただきたいと、そういう施策を目指していきたいと思っております。

委員：岡田校長先生から高校でも探究の時間が出てきてっていう話ありましたが、ということは丹後学というような、地域のことを知り、地域を理解し、地域を愛する、そういったカリキュラムというものは、高校にも広がってきているという理解でいいのか、そうだとすると、それに対して地元である京丹後市やあるいは産業界の皆さん方はどのように関わっているのか、そのあたりを教えていただければと思います。

委員：現在の峰山高校の様子については、今年4月以降ということで、十分把握しきれてはいないんですけれども、1つには京丹後市の方が地域おこし協力隊を地域コーディネーターという形で各学校に配置をしていただいております。また、roots という交流できるような施設等も整備いただき、高校生はもちろん、教職員もやはり探究的な学習というのは経験を持っておりません。自分が在学の時代はそういう学びというのはなかったもので、そういう外部の方、また企業とかですね、いろんな方の知恵とか、そういう専門性をお借りをしながら、今なんとなく形になりつつあるかなというような段階でございます。

座長：ありがとうございました。今の高校との関わりで、教育委員会として取り組んでいらっしゃるのと、市として取り組んでいらっしゃることはありますでしょうか。

事務局：市長公室川口です。岡田先生からご発言いただいたとおりですけれども、市長部局の方として地域おこし協力隊を市内3つの高校に一人ずつ配置をしまして、地域と高校生を結びつける。学校との間に入りながら、いかに地域の中に出ていくのか、地域の人々の熱量を感じていただけるのかというような役割で、地域との架け橋みたいな言い方をしていますけれども、そういう地域おこし協力隊を配置しているということが一つと、先ほど roots というような言葉が出ましたが、サードプレイスみたいなところを峰山高校から歩いて5分ぐらいのところに設置しまして、ちょっとした1階の場所ではあるんですけれども、そこに常駐する人材を配置して、高校生が相談事も含めて、こんなことがやりたいというようなことがあればそのアイデアを実現をしていくというような、そんな取組をしております。

目的は、地域への愛着を醸成し、愛着を醸成することによって地域への定着率を高めていこうというような取組でありまして、必ずしも丹後に帰ってこなくても関係性を持った形で、都市部で社会人として活躍するというような高校生を一人でも多く輩出するために、そういったサードプレイスの場を設けているというような取組をしているところです。

座長：ありがとうございました。丹後学のところから、今京丹後市で取り組んでいらっしゃることをいろいろとご紹介いただいたかと思うんですけども、このことで何かご意見でも結構ですので、地域資源を活用したというところも一つの論点になってこようかと思えますけども、そのあたりの取組に関しまして委員さんから、ご意見、ご質問いただければと思えますがいかがでしょうか。

委員：すみません、もうちょっと教えて欲しいんですが、先ほど高校生のアンケートで、住みたい住みたくないというアンケートがありましたけれども、中学3年の時の住みたいよりも高校3年時の住みたいの方が伸びているというアンケート結果だったことですね。そういう理解でよろしいですか。高校のアンケートのときの住みたい住みたくないの結果のところ、中学3年と高校3年を比べていて、増減で見るとそれぞれの町の増減がみんな増えてますよと、それも大宮町だと24パーセントも増えているというようなことで、かなり実は住みたい人が高校3年間で伸びているのかどうかその分析も聞きたいんですが、そこは何かをやっているから伸びているのか、それとも何か高校生の中にこういう体験をしているから実は伸びる要素があったのかとか、あるいはたまたまそういう結果で今のところ何が原因かまではまだ分析できていないのか、そのあたりいかがなんでしょうか。

事務局：細かい数字ではないんですが、約1割程度、高校生の方が住みたいが増えていたというような結果が表れています。平成29年度から中学3年生にアンケートを取り出して、高校生のアンケートは令和2年度からアンケートを取り出して、中学との経年変化はどうなっているのかを見ようということで取り組みました。岡田先生が言われましたけれども、2代前の峰山高校の校長が、令和2年度だったと思うんですけども、確実に愛着を持った生徒が増えているということを言われまして、それは丹後学の成果だと私は思っている

と、その時の校長先生はおっしゃってしまして、それだけが要因ではないとは思いますが、全体的に子どもたちは、我々の頃よりは確実に地域に目を向けている傾向にあるのかなというような、そこは岡田先生が言われましたように肌感覚なんですけれども、そんなふうな思いは私も持っているところであります。

委員：先ほどの先生の話だと、高校の探究の時間はこれからもう少し掘り下げは もちろん必要だと思うんですけど、そういう探究の時間も通して子どもたちはこの地域のことを学ぶ機会が、高校時代にも確保できるようになってきたと、まあそういうことも含めてと。

ですから、もう少ししっかりと、地域のことを高校時代においても学ぶような体制を組むことができれば、恐らくこの数字はもう少し改善してくる可能性はあるというふうに考えていいのかなんですけどね。

事務局：地域とのつながりの厚い子どもたちの方が、地域に帰ってくる傾向というのは高いのではないのかなと思っ てしまして、だからそういう意味では、どんな学びをするのかということもあろうかと思 いますけれども、地域と触れ合 う、学ぶ、ということは、こちらに愛着を持ってもらうという点では重要視 していくべきなのかなというふうには私は思っています。

松本教育長：牧野委員の言われるとおりと私も考えておりまして、確実に小中の丹後学 による成果は出てきている。はっきりとした数値というところまではなかなか行 っておられませんけれども、そういうところは、そうした探究的な学びが高校 の同じ探究的な学びにより高度になり、より広範囲になった学びになって いてつながっていくことによって、さらに数年後にはもう少しこういう数値 においても効果が出てくるのではないかなというふうには捉えているところ でございます。

委員：今のところに関連して質問してよろしいでしょうか。

座長：すみません。ヤング先生が挙手されていると伺いましたので、ヤング先生 からご意見いただいてよろしいでしょうか。

委員：先ほど笠沙座長が具体的に、京丹後という地域が持っているリソースを使っ て、何か京丹後に地域への愛着が増したような事例といったものはあったか っというようにおっしゃったので、その事例の一つとして少しお話を

させていただけるかなと思ったんですけれども、このタイミングでもよろしいでしょうか。

その取組というのが Kyotango Sea Labo というプログラムです。今回これまでの準備会で、京丹後市の教育と人材育成に関わる問題意識をこのメンバーで共有してきたわけであって、本日の第1回から具体的にそれをどう落とし込んでいくかという話し合いの場になるのかと思っており、その具体化案の具体的な取組例として、Kyotango Sea Labo があるのではないかと考えております。

ご配布いただきました資料の論点整理1の中の1項目にも入っておりますが、Kyotango Sea Labo のような教育課程外の取組を教育の中に取り入れていくことができれば良いのではないかというポイントが上がっております。この Kyotango Sea Labo をまだご存知ない方もこのメンバーの中におられるかと思しますので、ここで少しお時間いただきご説明させていただければと思います。

Kyotango Sea Labo とは京丹後市教育委員会と一般社団法人スカイラボが連携して実施している、3年間の取組でございます。内容といたしましては、デザイン思考という、人間中心のものづくりの発想法と言われているスタンフォード大学がペタゴジーとして生み出した発想法がございますが、それを京丹後の中学校3年生、高校2年生の方たちに英語で学んでいただくという短期集中型のプログラムです。先ほど申し上げましたとおり実験的に昨年の秋から第1回が始まっております。学びの対象者は中学、高校の生徒さんが受講生、ロールモデルとなるファシリテーター役に京都府内外からバイリンガルの大学生、大学院生がコーチとして参加します。さらに重要な点が、京丹後が有しておられる様々な素晴らしい伝統文化と地域産業を支えて、地域のために活躍をされている大人たちが、ユーザーという重要な役目をこのプログラムでは果たしていることです。参加する中高生は、京丹後市の素晴らしい人材をユーザーさんとして迎えて、彼らとの対話の中から地域に住む人々が抱えている潜在的な課題をニーズとして抽出する方法を、このプログラムで学んでいきます。さらに、一人で考えるのではなくてチームで連携しながらアイデアを出し合って、自分たちの発想を手にとって試せる形で可視

化させていく。これをプロトタイプづくりと呼んでいますけれども、プロトタイプにして可視化させたアイデアにユーザーさんからフィードバックをもらう。それをまたチームで話し合っってより人間のニーズに沿ったものに変えていく。人間中心の発想で人の役に立つエンジニアリング、ものづくりをしていく、さらにはサイエンスにつなげていくことの楽しさと大切さを学ぶプログラムです。最終日には、チームで連携して生み出したプロトタイプを、会場の大勢の前で英語で発信していきます。あえて英語でプレゼンすることの意味は、世界中で活躍するエンジニアやサイエンティストたちはつねに自分たちの発案を世界という市場を意識して英語という共通言語で発しているわけで、その意味で英語は、一人でも多くの人にアイデアを伝えるための大切なツールになりますので、その第一歩を釜見る様に体験していただくためなんですね。この際ですね、このプログラムを通じて、京丹後市教育委員会の先生方と私どもスカイラボで、3つのマインドセットということを繰り返し繰り返し強調しています。その3つのマインドセットというのが、京丹後市の人材育成に向けた具体化例の一例になるのではと考えております。第1回目でも少し共有いたしました。1つ目が Think out of the box 自分が無意識に入り込んでしまっている常識や通念という箱から自身を取り出してあげて、普段の当たり前から出て発想すること、2点目が Give it a try チームで協力して生み出す発想を成功率はそれおきとりあえず試してみようよというマインドセット、3つ目が Fail forward つまずくことは新しいことに挑戦している証拠でもあり、失敗から学ぶことで私たちは前進をするんだというマインドセット。この3点は、私がおりますシリコンバレーで STEAM 人材として活躍する人々に共通するアプローチではないかと私たちは考えており、イノベーターのマインドセットと呼んでいるんですけれども、これを繰り返し繰り返しメッセージとして京丹後の中高生に向けて発信していくことで、正解がなさそうな状況の中でも、人間を中心に発想して科学技術を使いながらこれまでになかった切り口で発案してみることでユーザーさんを驚かせたり喜ばせたりすることが楽しさを体験します。人間中心に科学技術を使うことの大切さを実感し、つまずきながらより遠くに飛躍するという姿勢を身につけて、SETAM 人材の一步を踏み出すわけなんですね。

第1回目が昨年の秋に行われましたが、私どもは研究者でもありますので、プログラム内での学びを実際にデータ収集いたしました。そのインパクトレポートをスカイラボがまとめさせていただいたんですが、その結果、非常に興味深いことに、このプログラムを通じて京丹後への興味、関心、思いといったものが、実際に向上していることが分かってきております。これは、そのデザイン思考という、もともとは産業革命後の大量生産へのアンチテーゼとして欧米で生まれ、スタンフォード大学を中心にツール化された発想のメソッドを、そのまま日本の学生さんに押し付けるのではなく、京丹後市という地域が有している歴史とか文化といった要素に配慮して、言ってみれば個別最適化したプログラムであったからこそ出てきた効果ではないかというふうに考えております。京丹後市教育委員会とのコラボレーションでこうした取組が行われており、実際に研究を通じて少しずつ少しずつ実証され始めているということ、共有させていただければと思います。これはまだ実験的なプログラムであり、昨年度は9チームに36名の中高生さん、9名の大学生さん、そして9名の京丹後のご人材、ユーザーさんに来ていただいたんですけども、今後の課題としては、これを学校教育を通じてもっと広めていき、先ほどから検討会で議論されている、実際に京丹後の地域リソースを使いながらこの地を愛するUターン人材、Iターン人材をどう育成していけるかということに具体的につながっていくのではないかと思いますので、本日は共有させていただこうと思いました。お時間ありがとうございました。

座長：どうもありがとうございました。このことについてはいろいろとご質問あるかと思えますけども、すみません、先ほどオンラインでご発言をいただいた方、今ご意見いただいてもよろしいでしょうか。

委員：すみません、意見というか、この前の、住みたい住みたくないのところちょっと質問だったんですけど、今デザイン思考のところ、話題が移ってしまっただけで、その質問はどこかの機会にしたいと思っております。

お伺いしたいのは、論点整理の船の絵のところ、丹後学のところはかなり充実したことを既にやられているように理解しているのです。小学校3年から中学3年までこの丹後学、船の絵の先端のところですね、帆のところはかなり充実していると思ったんですけど、STEAM教育のところ、たぶん MESH を

使った計測制御のプログラムというのが、中学3年の技術家庭の中でやられていると、そういう例で示されていると思うんですけど、その部分というのはその他にもいろいろやられているんでしょうか。丹後学はかなりやられているなという印象を持ったんですけど、STEAM 教育はどんなのかなって思っていたんです。船の絵の一番後ろの帆のところですね。以上です。ありがとうございました。

座 長：STEAM 教育の取組について、もう少しご紹介いただけますでしょうか。

事 務 局：はい。本当にまだまだそこが進んでないところが本市の課題だと思っておりますので、どんなことにチャレンジできるのか、是非委員の先生方に今日ご意見いただけると大変ありがたいと思っている分野であります。

委 員：Society5.0 を活用した学習指導というのは、今の STEAM 教育のところでそれに関連させた例として出てきているというふうに理解してよろしいですか。関連させて、こういうのだけ出てきているのか、それとはまた別の話なのか。Society5.0 ってすごく広い話な感じがして。どういう意図で出てきたのか。

座 長：冒頭の説明では、Society5.0 の中に位置づけて STEAM 教育というものを取り組んでいきたいというふうに私は受け止めていましたけど、いかがでしょうか。

事 務 局：それこそ教育課程内でもそうですし、先ほどヤング先生から紹介していただいた Kyotango Sea Labo という中でもそういうものに挑戦していているというのが、今現在の京丹後市の教育だと思っております。

座 長：ということですが、古賀委員いかがでしょう。

委 員：STEAM 教育の内容というのが、中学3年の技術課程のところで、10何時間かやられているということで例として出てきたと思うんですけど、それ以外のいろいろな課程も、約1,000時間ずつ毎年勉強していくと思うんですけど、その中に Society5.0 に対応した教育を入れていこうということが検討の対象にもなっていると思っていいますか。

事 務 局：そのとおりです。お願いいたします。

委 員：ありがとうございました。

座 長：ありがとうございました。STEAM 教育といってもなかなか難しいところがあり

ますので、それだけでカリキュラムを組めるわけではないというところがありますから、重点の置き方としてどういうふうに取り組んでいくかというところで、たぶん生徒たちがその辺を自分で、どれを得意にしてやってくかというふうなことも絡めてカリキュラムも組んでいくことになるのかなとは思っております。

かなり教育内容に突っ込んだ形でご意見いただいています。スカイラボのヤング先生の取組でご紹介いただきましたけれども、いろいろな要素が入っていますので、STEAM 教育ということも関わっているところだと思います。ああいうことをきっかけに、さらに勉強したいと思う生徒たちが出てくると思いますので、学校がカリキュラムだけでそれをやっていくのではないということ、ああいった学校外のところでの取組ということもこうした新しい教育につながっていく、学習につながっていくというようなことも見えてきているんじゃないかなというふうに思っております。

他、いかがでしょう。今の続きでも結構ですし、違う論点でいただいても結構です。いかがでしょうか。

委員： 笹沙座長申し訳ありません。もう少しだけよろしいですか。今とても大切な議論が出てきていると思いますので、この流れが変わる前に発言させていただきます。その STEAM という考え方については、日本や北米においても、様々な捉え方があって、まだその定義も収れんしているわけではないという認識をまずは共有させてください。

サイエンスとエンジニアリングと数学といった理数工 STEM 領域に A を掛け合わせた造語が STEAM ですが、その A に入るものは何なのかというところでいろいろな理解があることを、会議やセミナーなどに出席して思うんですけども、スカイラボが推進したい STEAM 教育における A とは人間中心に発想するヒューマニストとしての視点だと考えています。デジタル社会 Society4.0 を迎えて科学技術リテラシーをもつ人材を育てていく重要性は明らかです。しかしデジタルとアナログが融合するといわれる Society 5.0 を迎えて、STEM 領域で科学技術の専門知識やスキルを学ぶだけでは片手落ちになる。STEM を人間のために使っていこう、自分たちの手で世界をより優しい場所にしていこうという視座を育むことが大切であり、そのために STEM 領

域の学びにリベラルアーツ的な教育を織り込んでいくことが STEAM というアプローチだと私たちは考えているわけで、その一つの取組として、京丹後市教育委員会と連携して取り組ませていただいているのがこの Sea Labo というプログラムです。昨今 STEAM という言葉が政府や教育界を中心に頻繁に使われ始めておりますが、京丹後市で取り組んでいく STEAM 教育では A に何が入るかを明確に設定して、それを Sea Labo の様な取組みで今後の政策につなげられていけるかどうか、京丹後市で Society5.0 を担いリードする人材育成の鍵を握るのではないかなと考えております。発言の機会をありがとうございます。

座長：ありがとうございます。カリキュラムの考え方で、どんなふうに教育を進めていくかというところで大事にすべき視点というものをご提示いただいたというふうに思います。今のあの論点に関わってでも結構ですし、それ以外でも結構ですけども、いかがでしょうか。

萩委員いかがでしょうか。地域でいろいろ取り組んでおられる方と、Sea Labo なんかでも連携しながらやられたと思いますけども、こうした取組というのは地域の方からはどんなふうに映っておられるのでしょうか。あるいは何か感じてもらえることがありましたら、ご意見いただければと思うんですがいかがでしょうか。

委員：そうですね、かなり先進的と言うか、ここまで教育に関して京丹後市が熱心に力を入れているということを全然存じ上げなかったもので、勉強不足で申し訳ないですが、工業界と言いますか私らのプログラミングと、MESH とか Scratch と言うんですかね、プログラムのジャンルが違うのかなと感じまして、これはアプリケーションとかをつくるためのプログラミングがメインで今されているんですかね。

恐らくそうだと思うんですけど、峰山高校の今機械科ではないでしょうけど機械科さんでプログラムをされている生徒さんから、高校の3年生のちょっとした時間だけらしいんですけど、あまりプログラミングという時間、CAD/CAM というソフトを使う時間があまりないというふうに生徒さんから直接聞いたことがあるんです。私どもが使うプログラムというのは、そのシニングセンタに直接パソコンで CAM をプログラミングして、機械を動かして物

をつくるというプログラミングのジャンルなんですけど、今その峰高の生徒さんでもなかなかそういう即戦力になる生徒さんがいないのかなと感じまして、小学校から中高までこうやってプログラミングの授業に力を入れておられるんですけど、実際即戦力になるような生徒さんがおられない。おられるかも知れないけど、大企業に就職されたりとかで、なかなか丹後にそういう即戦力になる方が残られないのが現状なので、要望になってしまうかも知れないんですけど、授業の中でもマシニングに特化したプログラミングソフト等を扱っていただくと、すごく丹後の企業さんも喜ばれるかなと思いますので、ちょっと要望みたいになってしまいましたが、以上です。

座長：今のような地域の声と言いますか、地域の活性化につながるような教育を、今後どんなふうを考えていくかというようなことになるとと思いますが、教育長いかがでしょうか。

松本教育長：萩委員が言われるように、高校においてより専門性というところでのプログラミングというのは専門学科とかでは必要かなというふうに思っていますが、小学校、中学校においてはプログラミングというところとちょっと誤解を招くんですが、プログラムの思考と言いまして、プログラミングをしていく上での考え方であるとか、捉え方というのを主に学ぶのは、そうしたアプリケーションを使ったりして実際にプログラムをするわけではなくて、こうしたフローチャートの流れで動けばこのように動作がされるとか、プログラムによってこんなことができるようになるという発想ですとか、そういうところを学ぶのがメインとなるのでなかなか時間数的には多くの時間はないんですけど、その学びで興味を持った子が機械創造科とかでより専門性の高いところでのプログラミングに入っていきというような流れができると望ましいかなと思っております。

座長：ありがとうございました。先ほど10時45分までというのが高橋委員でしたでしょうか、よろしければ今までの議論を聞かれて、ご質問、ご意見をいただければありがたいのですが、いかがでしょうか。

委員：大変申し訳ございません。次の仕事があってここで退席させていただくんですけども、先ほどからすごい面白い話がずっと続いてきて、今チャットの方に書かせていただいたんですけど、実は去年の東大の入試問題で STEAM 教育

のSTEMになぜAが入るのかという入試問題がありまして、実は京丹後と同じで、丹後学がなぜ従来の学問の中に加えられなきゃいけないのか、加えるべきなのかっていうのは、皆さんで考えたらまた面白い展開になるんじゃないかなというようなことを考えていました。

時間がないのであまり話せないんですけど、ポイントポイントで浮いちゃっている感じがして、例えば丹後学にしてもデザイン思考にしても、スポットでは楽しいかもしれないですけど、それは恒常的にやっぱり学校の教育の中に落とされていないので、だからそのアンケートを取っても、その瞬間は楽しいと思うかも知れないけど、じゃあ結局それがずっと続いて本当に住みたいのかってなった時にはまた違ってくるかも知れない。いわゆる座学教科とデザイン思考でやっている京丹後のバランスをどうやって混ぜ合わせるのか、例えば京丹後の学問をするためにはどういう授業が必要なのかというのは、概念の方からカリキュラムに落とし込んでいく作業が必要になってくるんじゃないのかなと思ってですね、ちょっとまた次回までに僕自身も考えたいなと思いました。すみません。ありがとうございます。

座長：ありがとうございます。非常に大事な論点をご提示いただいたかなというふうに思います。学校ではよくありがちで、最初はスポットでそれを広げてくという考え方で進めていっても、もうスポットで終わってしまうというのが多くのところかなと思いますので、それを乗り越えるっていうふうなことは、この検討会でも議論していきたいというふうに思います。

他、いかがでしょうか。

委員：長井です。ちょっとまた基本的な質問みたいなのところに戻りますが、質問したい意図と背景を申し上げます。質問したいこととしましては、資料3の論点の資料の7ページ目の丹後学のモデルカリキュラムの例のところを拝見してるんですが、特にこのページの左の枠の中の各学年の指導内容のところの中1、中2あたりのお話を是非お聞きしたいなと思ってます。市の観光（市の機械金属工業）、職場体験というところで、どういったことをされているかというのを伺いたいです。

背景としましては、私はアントレプレナーシップについてのプレゼンは前回させていただきましたが、ここに書いてある小学校の内容、要は産業

を知っていくというところと、ヤングさんがおっしゃった Sea Labo の取組というのはそれぞれ非常に良いと思っていて、産業にも興味を持ち、そして Sea Labo ではまあ英語の運用も含めてかなり高度なプロジェクトになっていくと思うので、その中 2 階と言うか間に当たるような部分がこの中 1、中 2 ぐらいの恐らくこの部分かな、このあたりであるべきかなと今思ったのです。その時に適切な中 2 階と言うか、いい具合の階段になっているのか、Sea Labo みたいなものに辿り着くような階段になっているのかどうかというところに興味を持ったというお話でございます。

もう一度質問を繰り返すと、中 1 の市の観光（市の機械金属工業）であるとか、中 2 の、職場体験であるとか、こういった活動内容になっているかをお聞きしたいなというふうに思いました。

座長：ありがとうございます。まず具体的な取組をご紹介いただいて、今度委員からも中学校の取組について報告をお願いいたします。

委員：失礼します。各中学校によって、丹後学のモデルカリキュラムに基づきながらその地域の資源をどう活用していくかということで若干内容は違ってくると思うんですけど、網野中学校で言うと、1 年生は市の観光であったり、地域の自然であったり、地域を知るということに視点を当てて、実際に小学校の時に大地の学習山陰海岸ジオパークについて学習している小学校も大変多いですし、していくと思います。実際に地域に出て、実際にそこで探究的な活動を班で取り組んだり、資料館を訪れて資料館の方からお話を聞いたり、学校の方に地域の方々に来ていただいて、市の観光課の方やジオパークの方やいろいろと個人がテーマを持ってグループを編成して、そのグループに地域の方に来ていただいてお話を聞いて、地域を実際知っていくという、そういう取組を網野中学校ではしております。

中学 2 年生は職場体験ということで、このコロナ禍で、事業所に行ってそこで貴重な学校ではできない体験をさせてもらうことが、ここ 3 年間できていないんですけども、それに代わって地域の事業所の方から学校に来ていただいて体験も含めて講話を聞いたり、そして少人数ではないですけど、事業所の方に訪問させていただいて、見学、体験をさせていただいて、地域の産業を知って、どんなふうに自分が志を立てて、この後生きていきたいのか、ど

んな人生を自分は送っていくこととするのかということ、立志式という式で、学級の代表が全校生徒や保護者の前で発表をするという取組をしています。この立志式というのは一つの節目となる式として、ものすごく教育的な意義があり効果が大きいと思いますし、この思いや考えが中学3年生になった時に、自分たちが住んでいくまちがどんなふうになればいいのか、どんなまちにしていけばいいのかということ、をみんなで話し合っていくということにつながっていくことになります。

昨年、山陰近畿自動車道が峰山まで延長されるという中で、市の方からまちづくりを是非中学生に考えてもらいたいという、考えさせていきたいというお話を聞かせてもらって、網野中学校でも行なったんですけども、思いのほか子どもたちは、こんなまちにしたい、こんなものがあつたらもっとまちが活性化していくと、とても意欲的に話ができ、すごく良かったなと感じさせてもらっております。

先ほど Sea Labo のこともあつたんですけども、昨年本校の生徒2年と3年生が、フィリピンの生徒たちとオンラインで交流するという機会があり、ちょうど ALT がフィリピンの方だったので、そういう機会を持たせてもらったんですけども、とっても楽しそうに交流していました。田舎の生徒なので、外に自分のことを臆することなく表現したり、伝えたりすることが苦手な子が多いだろうなと思っていたのですが、そうではなく、そういう機会が今後増えていくことが、ものすごく子どもたちにとっては大きな力になるなということを感じました。すみません。話が逸れました。

座長：ありがとうございました。長井委員から、今の説明を聞かれて感想でもご意見でもありましたらお願いします。

委員：だいぶ立体的に様子を想像することができました。ありがとうございます。中1、中2の、地域のリソースと言いますか、どんな市かということが分かってから、それを立志式等につなげていくというストーリーが非常にできているのだなということ、を、まず理解しました。

あと、もし公教育的にという話で、これはちょっと私の立場からの少しアイデアにはなりますけれども、そういった市のリソースだったり自分がこういう市にしたいみたいな願いを組み合わせる時に、どんなことが実際にまちの

中で施策として打てるのか、そしてそのプロトタイプですよ、これをビジネスのプロトタイプと言い切っているのか商品のプロトタイプなのか分かりませんが、そういったチャレンジが少しでも原体験としてできていると、Sea Labo さんのような活動にも結構ストレートにつながっていくのかなという気もいたしました。

まちに残りたいと思うということは、まちに自分の居場所がある、やれるチャレンジの余白がたくさんあるんだという、その実体験と言うか実感が持てるかどうかということにかかっていると思うので、いい場所だなということ以上に、何か自分のアイデア、力を振るえる場所があるというような体験に、学びをデザインしていくことがもしかしたら有益ではないかなというふうには感じました。ありがとうございます。

座 長：ありがとうございます。地域を知るだけではなくて、何かにチャレンジするという要素が必要だろうということですね。

他、いかがでしょうか。

委 員：今お話を伺っております、Sea Labo は英語のプログラムだし、デザイン思考というなんだか難しそうなことを学ぶわけだし、学業優秀なエリートさんだけが対象かなという印象でおられると思うんですね。実際に昨年度、教育委員会の先生方と実施をしたところ、参加された方々は京丹後市の中でも教育リソースをお持ちのご家庭のお子さんたちだったのではという印象も受けました。面白そうだからやってみたらと背中を押してくれる親御さんをお持ちの方とか、もともと英語が好きだったり新しいことにチャレンジしたいと思っている生徒さんが参加しておられたかなと感じました。

とはいえ Sea Labo は必ずしも学級のトップに向けたプログラムではないと考えています。先ほど今度委員が、京丹後の子どもたちがフィリピンの留学生と交流した時に、臆するどころか楽しそうだったとおっしゃったことに私はすごく大きな希望を感じるわけですし、というのも Sea Labo に参加された中高生がとても生き生きとされていて、初めて取り組む難しい課題に、しかも天候不順で直前に3日間の内容を2日に切り替えたハードスケジュールだったにもかかわらず1人も漏れることなく最後までしがみついてやってくれたんですね。最後は英語での発表だったにも関わらず、みんな嬉しそうに堂々

としてやっておられて、京丹後という地域が育まれたお子さんたちが持つておられる潜在性をすごく感じました。

確かに参加されたのは、比較的英語が好きだったり得意だった生徒さんだったかも知れない。でも先生のお話を伺って、36人の他にもそんな生徒さんはまだまだいっぱいおられるのではないかと。デザイン思考に触れて、普段にはない切り口から発想することの楽しさを知り、3つのマインドセットを繰り返して学ぶうちに、破壊的なイノベーションにつながるような新しい発想をする人材が育っていくのではないかという希望を感じます。例えば Sea Labo で使う英語をもっと簡素化したり日本語による指導部分を拡大したりして、参加者がデザイン思考を身近に感じてきっちりと学んでいくことに最大限フォーカスしながら、公教育に落とし込んでいくことも十分可能だと思うんです。

そうした場合、対象とする学生さんたちの年齢層を下げることもできるかも知れません。タクトピアの長井委員がおっしゃいましたが、中1、中2というのがもしかしたら重要かも知れない。その場合には、教育委員会の方たちと連携を深めながら、京丹后市というコンテキストを考慮しつつ年齢に合った学び肩を抑えながらデザイン思考をしっかりと手近に引き寄せられるようなカリキュラムの構築が可能になります。Sea Labo は京丹后市で学ばれる一部のエリート学生さんだけを対象にした教育モデルではないということを、是非あらためて確認してみたかったなというふうに思いました。ありがとうございます。

委員：これまでの委員の先生方のお話も踏まえて改めて先ほどのアンケートの数字を見て思ったんですけど、住みたい住みたくないっていうのが、高校になって10ポイント大幅増加というのは、他の地域でなかなかないものではないかと思えます。それも、高校で別に先ほどのお話のように地域人教育をかなり徹底してやっているわけじゃなくて、まさに中3までのっていうことで、じゃあ高校で何をやっていくかというところが恐らく一番私はキーになるという考えを持ってまして、つまり住みたい住みたくないの数値を伸ばすと言うよりは、恐らく高校生はじゃあここにどうやったら住めるかっていうそのチャレンジまで、京丹後はもしかしたらいけるんじゃないかっていう、だ

んだんそういう気持ちになってきておまして、つまり地域人教育のさらにその先にあるのは、マイスター・ハイスクールでやっている産業人材の育成なんですよね。この地域に住めるようにするための、産業の担い手をつくっていきける、そこまで持っていきけるかもしれないという、そういう可能性を、実は先ほどからの議論を聞きながら思っておりました、だいたいそういうことができていない地域は、まずは自分の地域を知って、理解して、貢献したいと思う人を増やしましょうねという、ある意味では入り口論的な話から入ってくる場合が多いんですけど、この数字を見る限りにおいて、十分高校生がここに住みたいというふうに思っているわけですね。ところが現実的には9割の高校の卒業生がこの地域を一旦離れて行って、帰ってくるのがだいたい3割くらいだと、定着率は3割だと、このギャップをどうするか、つまり住みたい人は6割ぐらいいるのに、実際に定着できるのは3割くらいだと。ということは、その差を埋めるための力、それをどうやって高校時代から、実は大学も含めてなんですけど、力をつけていくかということになるかと思えます。そういう意味では地域人教育から、まさにこの地域の産業の担い手たる産業人材の育成まで、この京丹後において考えていきける、そういった人材育成をなんとか、やはりそうなると思うんですけど岡田先生が大変だと思うんですけど私は高校教育が一番のポイントになってくるかなと思っております。

座長：ありがとうございます。委員の皆さんご意見いただき本当にありがとうございます。そろそろ議題の1を終えたいと思うんですけど、まだご意見いただいてない方もおられるかと思っておりますので、もしご意見なり感想でも結構ですのでありましたらご発言いただきたいと思いますと思うんですけども、井上委員いかがでしょう。

委員：失礼します。勉強不足で、難しくてなかなか簡単に発言できるようなことではないなと思いつつながら、勉強させていただいています。私も中学生と高校生の娘がおまして、間もなく大学受験をして巣立っていくというような年頃になってきています。私自身も京都市内の出身なので、丹後について知らないことがたくさんありまして、子どもの方がよく丹後のことも知っていますし、英語に関しても、私はとても苦手だったんですけど子どもの方が早くから学んで、意欲的に英検を取りたいとかいうふうに頑張っています。

先ほどもおっしゃっていたように、住みたいという子どもさんが増えているけど、住めないという現状があるのは本当に感じておまして、丹後でもできる仕事に就きたい子どもさんは帰って来られるかなと思うんですけど、やっぱり丹後にない仕事を目指しておられる子どもさんは、帰ってこないという現状を目の当たりにしていますので、やはり丹後の産業などが発展したり、もう少しまち自身が発展すると、帰ってきたい子どもが帰りやすくなるのかなと思ったりしています。

教育が主の話なので、あまり産業の話をするのも良くないのか分からないんですけども、やはり両方を一緒に進めていくことが必要ではないのかなというふうに思いながら話を聞かせていただいています。すみません、勉強不足なのでこれぐらいしか言えないですけども、以上です。ありがとうございました。

座長：ありがとうございました。今のような実家のこもった話というのはとても大事なことだと思います。浅井委員、何かご提案されるようなこととかありませんでしょうか。

委員：ここで発言するのは違うかも知れないんですけども、一応義務教育から高校教育まで意識した教育の在り方というのがあるので、私のうちも中学生と高校生の子どものがいるんですけども、長男が高校受験の時に割と志望校の振り分けがギリギリまで分からなくて、ちょっと賭けみたいな、今年は峰高がすごく多かったとか、当たり外れとかそういうことがあったので、豊岡の方ではその辺の調整が中学校の先生方で、なんとなく数が分かっているみたいな感じで聞いたことがあるので、そういうことを京丹後市でもできないのかなというふうには思っているんですけど、ちょっと違うかな、どうなんでしょう。

座長：中学校と高校との接続のところをどんなふうに進めていくか、この検討会でも大きなテーマになっていくところだと思うんですけど、そのあたり中学校の先生の立場で今度先生どうですか。そんな苦勞をされているところがありますでしょうか。

委員：個人的な意見になってしまうかも知れないですけど、今は丹後の中学生はほぼ近隣の公立高等学校に入学することができます。と言うのは、やっぱり

生徒数が随分減ってきて、そういうところでは京都府教育委員会の方も高校の入試制度や在り方については本当に大きな課題ということで検討しておりますし。南の方は、私学の方に生徒が流れていくという大きな課題があつて、公立高校の定員割れということも大きな問題となっている現状があります。そういうところで、とても中学3年生が卒業していく際の進路指導はとても大事に丁寧にはしている実態はありますけれども、ただ志望数の状況を見て、こっちの方が、とかいう指導は一切していませんし、一番子どもたちが自分の将来を見据えながらどんな勉強をしたいのか、どんな生き方をしていくのかということをしつかりと考えていく力を育てて、最終的にその進路に向けて応援して指導いくというのが、どこの学校もだと思えます。すみません、回答になっていないかも知れませんが。

座長：ありがとうございます。進路指導の在り方とともに教育内容をどうつなげていくかということだと思えますし、当然その教育内容に惹かれて志望しても受験のところ、ということがあるかもしれませんが、その辺は制度のつくり方によって上手くつなげられるというようなアイデアをこの検討会でもどんどん出していけたらなとは思っています。

高校側としてどうでしょう、京丹後市でやろうとしていることを取り入れたカリキュラムというものに変えていくような可能性は、高校の側からどんなふうにお考えでしょうか。

委員：高等学校の場合は、出口の部分が大きな課題として、使命として与えられますので、それぞれの生徒の希望する進路をいかに保証していくかというところで、カリキュラム等も考えていかざるを得ないというところは実際にはあります。ただ、今この総合的な学習の時間丹後学の事業実践のこのプログラムを見せていただいて、実は中学校までの学びについて高校がやはり理解が足りないなということを感じております。小学校、中学校でこういう学びを系統的にやっているのであれば、それを受けながらさらにスタートの場所をもっと変えたいとか、また中学校までに学んだことを受けて高等学校でどうするかというような、そういう切り口、発想が、もっともったできたであろうなというふうに感じておりますので、高等学校のカリキュラムというよりも総合的な探究の時間の内容について、もっともった改善ができる余

地があるなというふうには思っています。

座長：ありがとうございます。論点はかなり重要なところを集中的にご意見いただいたと思いますけども、もう一度資料をご覧いただいて、何か論点の中で抜けているようなことや、この場で言っておいた方がいいなというようなことがありましたら、今ご発言いただければと思いますので、オンラインでご参加の方でも、ここでおられる方でも結構ですし、事務局の方で、この点もう少しご意見をいただきたいというところがありましたら言っただけであればと思いますが、いかがでしょうか。だいたい大事なところのご意見いただけたかなと思ってはいるんですけど。

事務局：先生方ありがとうございます。もしよろしければ中川委員の方から今丹後学ですとかスチーム教育、アントレプレナーシップ教育というところのいろいろな教育内容の意見が出ておりますが、それを GIGA スクールという一人一台、今日委員皆様にも一人一台 iPad がありますけど、小中学生全員、高校生にもということになっていますので、こういったものを活用した先ほどの教育内容というところをより深くしていくためにはどうしたらいいかを少しお伺いしたいなというのと、あとは古賀委員の方から最初に丹後地域の愛着について少しご質問があるというところがまだ聞いていなかったかなと思います。もしよろしければそのあたりもう一度お伺いできればうれしいです。

委員：義務教育なので、全ての子どもたちに等しく機会を提供してあげたいなというふうにお聞きしながら思っておりまして、ベストプラクティスと言うかいくつか良い取組を教えていただいたので、それが面で展開できるように端末を上手に活用して、今回はちょっと遠隔で様子を見ているだけだけでも次回はオンサイトで参加するとかいう組み合わせができればと思うのと、今年度是非学校にもおじゃまして端末の利活用状況や教育の内容についてもお伺いしたいと思っておりますが、子どもたちがしっかりと端末を使って自分の意見を教室の中で展開できているのかということから取り組んでいく必要があるなと思っております、先ほどの Sea Labo の取組でも子どもたちが自ら英語がそんなに得意じゃないにしても発言していこうというようなお話がありましたが、やはりどんどん自分の考えを発言していく必要があると思っております、はいはいと活発に手を挙げる子もいれば、じっと考えていて

その考えを最後にこうアウトプットしていく、これは文章でアウトプットするのが得意で、ちょっと手を挙げたくないけどメモはしっかり取っている、みたいな子がいた時に、そういう子どもたちの意見がしっかり取り込めているのだろうかというのを、これは先生方の教育の内容を大きく変えなくても、聞いている子どもたちに例えばチャットを許すとかですね、よくチャット禁止の教育委員会があって、禁止するのは簡単なんですけど、授業に関係ないチャットは当然マネジメントしていくべきなんですけれども、例えば今先生がお話ししている内容が分からないとか、退室された高橋先生も今日もチャットでいくつか東大の試験でこんながありましたよみたいなことを教えていただいたりとか、こうやって発言している以外の皆様、教室だと子どもたちが、脳をどれぐらい活発に使っているかというところは全ての学校で見ていきたい、そういう活動ができていると、長井先生やヤング先生が取り組まれているような活動に入った時に、そういったツールを十分利活用できるんじゃないかなと思っています。

あとは、冒頭でも申し上げたように、プログラミングの取組はしっかりやっていきたいなと思っています。というのが、例えば機械の操作等々も含めて、まあ専門的な知識というのはだんだん高校卒業して専門学校に行ったり大学教育で学んで行ったり、もしくは実社会に出て OJT で取り組んでいくことだと思うんですけども、その前の体験がしっかりと、企業は一から育成していかなくちゃいけないと、学校何やってたんだみたいな話は産業界ではよく聞かれるところで、そういう意味では小学校からプログラミング教育を行っていき、今中学校の STEAM の MESH の話をさせていただきましたが、何だったらそれも小学校 6 年生でやりませんかというところも思います。中学校はさらに高度な内容を行い、例えば高等学校だと本当に Python を使って統計やってみようとか、そういうところが現れ始めていますけれども、小中学校で興味関心がしっかり高ければ、高等学校に接続していく内容、高等学校は学習の内容は専門的になっていきますので、小中学校でいかにたくさん体験をし、高等学校で勉強したいという状態で高校に入っていくのがまあ重要かなと思っています。今お聞きをしております。すみません、ちょっと話が長くなりました。

座長: ありがとうございます。かなり具体的にご意見をいただいたと思いますし、

是非実際に端末を使ってどんな学習をしているかを見ていただきたいなというふうにも思いました。

委員：先ほどお伺いしたかったことで、アンケート結果のところの住みたい中学3年次と高校3年次で、いずれも高校3年次で伸びているというのはそのとおりで、高校での教育の成果なのかも知れないなと思うんですけど、この分類が町ごとになっていて、申し訳ないんですけど丹後町と久美浜町がいずれも低いというのには何か理由があるのかなと。私は京丹後市のことをよく知っているわけじゃないので、その地域のこともよく分からないんですが、何かあるのかなということがお伺いしたかったです。

事務局：6町が合併をして京丹後市が誕生してしまして、どちらかと言うと区長会と言いますか、住民の方から旧町ごとの分類でアンケートを取ったらどうかというのがあって始めている背景があります。そういう中で丹後町と久美浜町が低いという状況については、丹後町については京丹後の中でも一番高齢化率が高い場所で、丹後半島の突端の方にある場所になりまして、そういったことも背景にあるのかなと。久美浜は周辺部に位置づけられるんですけど、そういうようなことが要素としてはあるのかなというふうに思っております。あとは親がどういうふうに言っているのかということや、学校でアンケートを取る時の状況スポット的な状況といったようなことも影響はあるのかなというふうに思っております。

座長：ありがとうございます。京丹後市の中の地域格差というのはそんなに深刻に考える必要はないということによろしいでしょうか。

事務局：はい。旧町ごとの分類というのは、我々にしたらそれはあまり考えていないところでございます。

座長：古賀委員に続けてお伺いしますが、よくデジタル人材というふうに今社会で言われるんですが、その中で我々は今日は教育内容についてはプログラミングというところが少し重点化した議論になったかなと思いますが、そもそもそのデジタル人材というものを古賀委員の立場からどう捉えていらっしゃる、実際に今大学の中でもそういったことを展開されているとは思いますが、さらにそれを小中学校そして高校というところに裾野を広げていくようになった場合に、プログラミング以外にこういった資質ですとか、教育の在り方

ですとかということのお考えがあれば、お伺いできればありがたいです。

委員：プログラミングと言うとどうしても開発者みたいな方向の思考になってしまっていますが、そういったことではなくて Society5.0 ということ意識して教育の在り方を考えるとすると、今はもう違うのかも知れないけど、従来型の IT のツールを使わない、教員が黒板の前でいろいろ説明し、それを生徒が一生懸命ノートを取るといったスタイルの教育の形から、皆さんタブレットを持ったりした授業を、既に展開されているのかも知れませんが、先ほど外国との通信で交流を持ったという報告がありましたが、教育全てにそういった ICT の活用を考えるということが今後必要なんじゃないかと思います。それをデジタル時代と言うかどうかわかりませんが、つまり以前は、IT というと開発のことばかりに目が行っていたと思うんですけど、そうじゃなくて日常的な授業でも、確か前に中川さんが反転授業によるアクティブラーニングで、非常に成果が上がったといったお話がありましたが、そんなふうなことにも IT を使ってやられたらいいんじゃないかなと思います。

本学でも、全ての学生がもちろんノート PC は常に持って、それを活用した授業を行っています。それはどの授業においてもそういうふうに行っているということでございます。

お答えになっているかどうか分かりませんが、STEAM 教育でやっているプログラムというのは開発を行うプログラミングをやるための勉強ということよりも、むしろ ICT を普通の授業の中でも活用していくというのが今後じゃないかなと思います。

座長：ありがとうございました。日常生活でも、携帯とかスマホなしで我々は生活できないところまでできていますので、教育という場でも当然そういうふうな感覚にこれからもなっていくんじゃないかなとは思っていますので、そこをどういうふうに教師自身が考えていくかということだとは思っています。かなり発想も含めて考えていかないといけないところがあるように思うので、どうしても教師は禁止をしたがる場所がありますので、ある意味で消費者のことは気にしないぐらいの腹のくくり方をしないとそこまで徹底できないのかなと。ただ、全部コントロールしたい、秩序が乱れることを教師は恐れるんですけど、そうではないということを教師がどれだけ実感として理解してく

れるかなというところかなと思っています。收拾できなくなってしまうという怖さは、教師が常に感じるところであるんですけど、そこに耐える力が教師には必要かなというふうに私は感じています。

委員：一つコメントをしてもいいでしょうか。

プログラミング教育と言うと、プログラマーを育成したいのかとか、ITエンジニアを育成したいのかという誤解を受けるかなと思って、古賀委員からそうではないんだよというお話をいただいたんですけども、そこに一つ付け加えて、今日産業会からも委員の先生方いらっしゃっているのでお話をさせていただきます。画面共有させていただいてもいいですかね。

このスライドは、今週、東北大学の教育学の授業で大学1年生にお話ししたのですが、今産業界はITとすごく密接に関わっていて、ここにあげた産業全てITを使わないということがなくなってきています。それは単純にその銀行の窓口やATMでコンピューターを使うということではなくて、スマホで口座が開設できたりとか、例えば農業でドローンを飛ばして農地をスキャンして必要なところに必要な部分だけ農薬を撒くというセンシングをやったりとか、小売りのところで大学の授業ではコカ・コーラの自動販売機の話をしたのですが、コカ・コーラの自動販売機というのはスマホで購入ができたり、そのデータをもとにどこにどんな商品をレイアウトするかをコカ・コーラのマーケティングチームは決定したり、ご存知のとおりコカ・コーラはITの企業じゃないんですけども、ITが非常にタイトに連携してきているというのが現状で、きっと教育もそうで、国語の授業×ITとかというような発想がどんどん必要になってくるんだと思います。座長もおっしゃったように、今はもうITが世の中の生活の中に切っても切れないとすると、良き使い手であるためにそのつくりをよく理解しているということが重要で、そういった取組を行っていく必要があるんですよと、なのでプログラミング教育は単純にプログラマーになるための職業訓練をしているわけではないということはこの場の皆様とは共有しながら、京丹後の教育の中にコンピューター、プログラミング、IT、これがひいては先ほど冒頭に「何ですかそれ」とおっしゃったSociety5.0というのがコンピューターと生活や産業がもう密に連携して、その時代を生き抜く子どもたちに必要な資質能力を提供していきましようという

部科学省や国は考えていて、それを京丹後ではしっかり実装して最先端行きましようというのが今日の会議の一つのゴールなのかなと思っています。すみません、やや蛇足になったかも知れませんが、コメントをさせていただきました。ありがとうございます。

座長：ありがとうございました。プログラミング教育ということのイメージがかなり共有できたのではないかなと思います。

ではよろしいでしょうか。非常に活発な、刺激的な意見をいただきまして、本当にご意見を伺っていて楽しかったなというふうに思います。

それでは議題2に移らせていただきます。

(2) 子どもたちからの意見聴取の在り方について

事務局：(事務局説明)

座長：ありがとうございます。目的やアンケートの方式、そして内容、それぞれについていろいろご意見おありかと思しますので、どういうところでも結構ですのでご質問やご意見いただければありがたいです。いかがでしょうか。

委員：質問がございます。アンケートの実施と集計時期について伺いたいと思います。まずアンケート項目のQ3にあげられた問いですけれども、これはどなたがお考えになったものでしょうか。京丹後市の教育委員会の先生方でしょうか。

事務局：指導室の指導主事みんなで知恵を出し合って考えました。

委員：素晴らしいと思いました。みんなが自由に発言できるプラットフォームをこの質問を介して構築されているなど感じました。すごく効果的な聞き方だと思います。これで大きな部屋をつくってあげて、みんなが感じたり考えたりしたことを自由に共有できる場をつくってあげることで、大人がリードするのではなく、子どもたち自身の内なるボイス、声が聞こえてくると思うんですね。願わくはそのボイスをベースに次なる設問を構築していくのが理想的ではないかなと思いましたので、このアンケートの実施時期にもう少し余裕を持たせることができるのであれば、先にこの大きな設問を聞いてあげて、そこからかれらが大事だと感じている事柄をまずは抽出して、抽出したキーワードから質問をつくって、そういったことを考えている子たちがどのぐらいいるのかを検証していく。質的調査から入って次に量的調査につなげて、2段階で進めていくことができればより効果的かなとは思いました。とはい

え、もちろん時間等の制約もあると思いますが、とにかく素晴らしい設問だと思いましたので、私からのフィードバックとして共有させていただきました。

座長：ありがとうございます。実は打ち合わせで私も同じことを申し上げました。実は選択肢があったんですけど、これではだめだと。大人が考えて選択肢をつくってもだめだということで、今日は出すのを控えていただいたということ打ち明けます。すみません、全く同じご意見だったのでばらしてしまいました。私も同じことを思いましたので、この問いを生徒たちにまず投げかけてもらって、その声を拾って選択肢をつくり、量的に測ることが本当に必要なと思います。

今日今度委員がおっしゃった、「アイデアを聞いたら思わぬ形で出てきた」というふうなことはあったと思います。たぶん中学生は答えると思います。学校の先生方は「答えが出ないんじゃないか」、「それでは生徒たちも苦しめることになる」なんて常にそういう形で先回りをしていろいろと考えられるという習性が、どうしても教育関係者にはありまして、それをもうやめようというのがこれからの教育の考え方であるはずですので、本当にヤング委員も同じ考え方でご発言いただいたので、私もそれに乗じて発言させていただきましたけれどもいかがでしょうか。今度委員いかがですか。どんな学校をつくりたいですかというこの問いかけに中学生は答えるのでしょうか。

委員：ああでもない、こうでもないと言って、少人数のグループの中でいろいろな意見が出るんじゃないかなというふうに思います。

座長：そうしますと、少し時間はかかるんですけども、それぐらい丁寧にやって、この検討会の終了の時にぐらいい間に合うような感覚でいいと思いますので、そういう意見を踏まえて最終案を私たちが考えてきたことと、生徒たちの声を擦り合わせるような機会があれば十分ではないかなと思いますので、少し大変かも知れませんが、学校の協力もいただいて、そういう場を設けていただくことができればいいなと思うんですけど。網野中学ではできそうでしょうか。

6つの中学校がありますので、それぞれで生徒会の役員さんだけでもいいかと思うんですけど、そういうところで少人数でフリーで意見を言ってもらっ

て、その声を拾って選択肢にしていくというのが一番私も適切ではないかなというふうに思います。

他にいかがでしょうか。もっとこういうことも聞いてみたらどうかとかいうふうなことも今出していただいたらいいかと思うんですけども、いかがでしょうか。

委員：今座長がおっしゃったのはほとんどワークショップですね。アンケートよりもワークショップをやった方がいいんじゃないかというふうに私は聞きましたけど。むしろその方が、一人一人でこう聞くというよりは、ワークショップ的にこうグループで議論して自分たちとしてはこう考えますとプレゼンテーションができるぐらいまでやった方が、生徒たちのためにもなると思いますし、我々もそういうまとまった形での意見を聞けるということではないかなと。まあできればプレゼンまで含めてやってもらってもいいような気がしますけどね。

座長：量的なデータが欲しいというのも、行政的にはその力が持つんだろうなということは感じましたので、たぶんそういう意図もあるんだろうと思ってアンケートというところを考えておられるのかなと私も受け止めておりましたけど、ワークショップをして、この場でプレゼンをしてもらうというようなことも一つのアイデアであろうというふうには思います。

他にいかがでしょうか。

委員：手法としての一意見ということですけども、今お聞きになろうとしていることは理想状態を聞くということだと思んですけど、よりどんな生徒さんでも発想しやすくするという意味における工夫として、例えば現状と理想みたいなビフォーアフターじゃないですけど、そういった枠でやってもいいのかなと思いました。

ただ、欠点としては、現状を先に書かせると、恐らくそれへの改善にしかないないので、もちろん今のご質問というのはそれをさらに飛び抜けた、ヤングさんの言う Think outside the box な言葉を引き出すならば今の問いでも、そっちの方がワークするところもあるかなとは思いますが。発想の引き出しを投げ込むという意味合いで言ってみました。現状と理想みたいな、その言葉を使うとは限りませんが、そういったフレームワークもあるかなとい

うふうに思いました。以上です。

座長：ありがとうございます。中学生たちは京丹後市をどう見ているのかという本音を聞いてみたいというのは、確かに思うところではあります。他いかがでしょうか。

委員：これもアンケートの聞き方、手法だと思うんですが、最初の問いで何を答えていいのかフレームが浮かばない子どもがいた時に、他社の意見を聞くことによって、ああそういう観点か。それならそこをさらに補強してこんな意見が言いたいみたいな、教育だと割と自分で考えなさいと自分の意見を言わせる。それを考えるプロセスが大事なんだというところがあるんですが、出ないものは出ないということを考えると、乗っかりみたいなものは私は十分にあっていいと、技術革新が全く新しいものばかりではなくて、過去の改善から生まれてくるケースも考えるとすると、最初に一度この問いを投げて答えが出てきたものを開示して、これに刺激を受けてさらにプラスアルファで言いたいことがありますか、のような聞き方も十分にあり得るかなと思っていて、ちょっと面倒ですが2回やるということも、ワークショップまでできないんだとすると2回同じことを聞くと。1回目の答えを開示するっていうようなやり方もあるかなと思ってお聞きしていました。

座長：ありがとうございます。やることとして新たな案を出していただきました。ありがとうございます。他いかがでしょうか。

委員：中川委員のご発言に対してのフィードバックというか上乘せなんですけれども、すごくいいご視点だと思いました。私たちのワークショップでも、個人ごとのブレインストーミングという作業を取り入れ利用しています。デザイン思考はコラボレーションが重視されるんですが、スカイラボでは、生徒さんたちに自分はどんなことを考えていてどんな人なのかを知る機会を持っていただくことを意識してカリキュラムに取り入れております。中川委員がおっしゃるようにまず自身の意見を探ってみて、その後で、先ほど牧野委員がワークショップとおっしゃっておられましたが、フォーカスグループのような形でチームごとに共有する作業を通じて他者の視点に自分の意見を上乘せして膨らませていくような議論というか対話にしていくことで、いろいろな発

想が出てくるのではないかなと思いました。

座長：ありがとうございます。こういうことは学校の先生方の見えるところでやっていると、先生方の意識も変わるだろうと思うので、先生方に閉じた形でやるのではなく、できれば先生方にも関わってもらって、またその様子を見てもらうということも必要かとは思いますが、それが学校の先生方の意識を変えるすごくいい力にもなっていくような気がしています。そういう意味でアンケートでデータを得るだけじゃなくて、そのプロセスでいろいろなことが起きるといことも期待しながらやるのが大事かなというふうにも、いろいろな先生方のご意見を伺いながら感じました。

他いいかがでしょう。どんどんアイデアを出していただいたらどんどん発想が広がってくると思うんですけど、いかがでしょうか。

だいたい出たような感じでしょうかね。ありがとうございます。こういった議論が本当に必要なんだということ改めて感じましたので、いいご提案をいただいたかなというふうにも思いました。今日いただいたご意見をもとに、どんなふうの実施できるか、学校の労力といいますか、学校でどれだけのことができるかということも関わってくると思いますので、無理のない範囲で可能な形で実施を考えていただければと思います。次回の会議でもう少し具体的にご提案いただけるかと思しますので、その時にまた議論いただければというふうに思います。

どうもありがとうございました。本当に活発なご意見をいただきまして、今日もいい会議になったかなというふうに思います。以上で本日予定していた議事は終了になりますが、その他で何かございますでしょうか。

今後のスケジュールについて

事務局：(事務局説明)

座長：ありがとうございます。それでは以上で今日の県道会を終了したいと思います。皆さんどうもありがとうございました。進行のほうをお返しいたします。

事務局：笹沙座長、議事進行ありがとうございました。また委員の皆様におかれましても、本日は本当に活発にご意見いただき、ありがとうございました。なかなか準備会の中では今日のようにご意見を十分いただく時間がございません

でした。今日初めてこういった形で意見交換を十分させていただけたかなと思います。また事務局の方でまとめまして、アンケートについても十分踏まえてまた検討を進めていきたいと思います。

それでは、以上を持ちまして第1回の京丹後市の新たな教育人材育成の在り方に関する検討会を終了いたします。委員の皆様本当に今日はありがとうございました。また次回よろしく願いいたします。